

うたごよみ

曾於文藝

俳句

千草俳句会

睡蓮の見上げる先の慰霊塔

千田 茂子

風去りし今宵の庭の虫しぐれ

川辺 良彩

山住みの庭の往き来や虫時雨

田之上 千代子

大隅俳句会

農道の落穂を拾ひ木の枝に

川崎 綾子

酢造りの杜氏の姿点となり

岩重 みどり

芙美子碑に無垢なるかろき落し文

河南 ミホ



サツマアザミ (大隅町月野)

短歌

末吉短歌会

孟蘭盆のしきたり今に絶ゆる

なし盆提灯の家紋引き継ぎ

小野 清子

銭湯の常連客へにこやかに

あいさつ交す新人として

平田 美穂子

さび抜き寿司のごときか何事もピリツとしない今の政局

宝蔵 弘二

大隅短歌会

背のびして両手を開く幼子の

見上げる空に竹とんぼ飛ぶ

川田サダ子

年をとり動きのにぶい「猫のメ

イ」糞だけは穴を掘り埋めおり

吉崎 フサ子

梅雨明けを待ち焦がれしひとときの浮世謳歌を蟬なき交わす

加塩 秀子

「題字」

末吉文化協会会員

瀬戸口 淳 氏

財部短歌会

案じあし二百十日も事なくて

秋の夕日は部屋の奥まで

川俣 若

朝霧に低空飛行のへり散布おっかなびっくり跳びたつスズメ

井上 澄子

ひと時の午睡邪魔するマイク音リサイクル車は行ったり来たり

児玉 次雄

からからと茶色の音を鳴しつつ足もと駆けゆく桜の落葉

杉村 リカ

背高きけやき並木はいと涼し私の煩惱いやしてくれぬ

祝迫 道雄

二百十日無事に過ぎたり豊作が約束されたり米余るとも

橋口 貞男

紺碧き空ホルンの響きか雲の嶺若き日の北アの山々テレビに

山城 忠

台風より我が家の一部守りくる背高く茂るくろがねもちの木

瀬戸口 芳子

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

丁度ち 叩えた蠅の奴

ぶんち飛つ 古川 一幹

着物着替え 丁度ん裸け

ベルが鳴つ 森山 厚香

新燃い がつつい被い 鈴木 一泉

蓋が欲し 金バツジ 会議や居眠いで

晩なべし 田代 勝泉

大隅薩摩狂句会

軽口が 他人ん古傷ず

疼かせつ 山田 竜生

子を叱った 後じゃ後悔しつ

疼っ内心 西山 美代子

見舞行たつ 涙は袂て 福元 多喜子

器用な女房 見事ちゆ涙を 小倉 りんりん